

## Y08b 公開天文台での定常観測生データの公開

豊増 伸治 (みさと天文台)

昨年春の年会では、音声による流星電波観測のインターネット中継を常時行っていることを報告したが、その音声のFFT画像(大川一彦氏のHROFFT使用)や、別の周波数の強度(CSVファイルなど)の観測生データも公開している。

筑波大学小川宏氏とのFFT画像による共同観測では、まもなく1年が経過しようとしており、その成果は「世界の流星電波観測による流星群活動完全監視」として本年会太陽系セッションでも発表されているので、その観測方法としての側面を報告する。

昨今公開天文台などでは、社会的情勢をとらえ、天文イベントについてのインターネット中継などが頻繁に行われており、初歩的な天文教育・普及には大きな効果を上げていると考えられる。一方、公開天文台を研究施設として見た場合、観測に対する天文学的成果を出すまでの十分な能力(機材や人的余裕)を持たないことが多く、もしそれを実現したとしても、公開天文台としての設立主旨とはかけはなれたものになってしまうことが心配される。

そこで、公開天文台としての資源(立地条件、機材の大容量化低価格化、ネットワークの常時接続など)を生かした研究観測方法として、観測生データの公開を実施中である。やる気と専門性の高いアマチュアの方などに、一貫性のあるデータを提供できる。また、集計された数字だけでなく、その結果をもたらす生データそのものが見られるため、観測入門時の教育的な情報源としても利用されている。観測データは利用されてはじめて価値が生じるため、中途半端なものにしないためには、本来自ら行っている観測・研究であるという明確な目的(責任)や、利用者への積極的な協力・指導が重要である。